

## 令和 7 年度 教育課程編成委員会 報告書

大阪市立デザイン教育研究所

## 1 今年度の取り組みの総括

今年度は、例年以上に多角的な広報活動を展開した結果、入学志願者数が増加し、入学定員を充足することができた。一方、社会環境の急速な変化やデザイン分野における技術革新を踏まえ、入学者の実態や社会のニーズに対応したカリキュラムの整備が重要な課題となっている。このため、産業界等からの助言も踏まえながら教育内容の充実を図る必要がある。

また、科目「キャリアデザイン」や就職エージェントとの連携を強化し、学生が早期から就職活動を意識し主体的に進路を考えることができるよう、進路指導の充実に取り組んでいる。

## 2 今年度の取り組みについて

## (1) 教育課程（新カリキュラム案）について

○土曜日授業については、教員の働き方改革にも配慮しながら年次進行で見直しが進められており、教育活動と教員の働き方の両立を図る取り組みとして評価できる。次年度の完成に向けた取り組みが期待される。

○「ArchiCAD実習」を2年次から1年次前期へ移行するとともに、1年次後期にはAutodesk Aliasを活用した「デジタルモデル制作」を新たに開講するなど、社会の動向や学生の学習状況に対応したカリキュラム改善が進められている点は評価できる。

○さらに次年度からは「映像デザイン基礎」の設置が予定されており、映像分野の教育内容の拡充を図ろうとする取り組みは、時代の変化に対応した教育として期待される。

## (2) 「運営に関する計画」、「学校アンケート」について

○大阪府内を中心に、兵庫県、和歌山県、奈良県の高等学校および美術系塾など計75校を訪問するなど、積極的な広報活動が展開されている点は評価できる。出前授業や合同進路説明会への参加など、多角的な広報活動が志願者数の増加につながっていると考えられる。

○ホームページにブログを掲載するなど情報発信の強化にも取り組んでおり、本研究所の教育活動の周知を図る取り組みとして評価できる。

○高校1・2年生を対象とした「チャレンジ講座」や入試説明会での体験講座など、体験型の広報活動を実施している点も、進路選択を考える高校生にとって有意義な取り組みであると考えられる。

## (3) その他

○近年、デザイン業界ではAIの進展など社会環境の変化に伴い、デザイナーの採用状況にも変化が見られると指摘されている。こうした状況を踏まえ、今後の就職指導や進路指導の在り方について検討を進めていくことが重要であると考えられる。

○科目「キャリアデザイン」や「特別講義」の内容をさらに充実させ、社会の変化に対応した進路指導やキャリア教育を推進していくことが期待される。

○阿倍野税務署と連携した納税促進に関するデジタルサイネージ制作の取り組みは、社会と連携した実践的な学びとして意義があり、学生が国民の三大義務の一つである納税について理解を深める貴重な機会となっている点は評価できる。作品の評価も良好であったことから、今後の社会連携活動の発展も期待される。

## 3 今後の教育課程への意見

○デザイン業界における採用状況の変化を踏まえ、学生が早期から自身の適性や強みを理解し、主体的に進路を考えることができる教育の充実が求められる。

○企業側からは、主体性やコミュニケーション能力など社会人としての基礎的な力の重要性が指摘されており、こうした力を育成する教育の充実が期待される。

○本研究所では、課題研究（探究学習）や各種プロジェクト活動を通して実社会に近い実践的な学びが行われており、その教育活動は高く評価できる。

○AIやDXが目される時代において、人と人とのつながりを重視した教育が行われている点も本研究所の特色として評価できる。課題研究では「なつかしさ」や「香道」など多様なテーマに取り組んでおり、学生の感性や創造性を育む取り組みとして興味深い。こうした研究経験は、感性工学などの分野とも関連し、今後の発展が期待される。

○今後はデジタル分野の充実とともに、照明デザインなど新たな分野の導入や、自然をテーマとした学びなど感性を育てる教育内容の充実も検討されることが望まれる。また、プロのデザイナーとして求められる細部への配慮や言葉遣いなど、基礎的な姿勢や態度の指導についても引き続き重視していくことが必要である。

## 1 今年度の取り組みに対する総括

○社会の変化に対応するために、次年度から企業の協力を得て「デジタルモデル」の授業を新設する計画と高校でメタバースを学んだ生徒対応を見据えて1年からその分野の授業を充実させる教育課程の改善策は評価できる。

○洋式トイレを整備することによって学校アンケート結果が劇的に改善していることがわかった。

○「何？」と思わせるコトをどうつくるかが大事なので、今後はそういうデザイン教育により一層取り組んでもらいたい。

○講師登録のポスターを見て素晴らしいと思った。

## 2 今年度のプロジェクトや授業の取り組みについて

<p>(1) 進路支援 進路ガイダンス、面接対策、応募書類対策、報告書の改善、進路支援に関する講義などを充実させ、自己実現へのサポートを図った。 就職支援システム、ハローワークとの連携、校内での企業説明会の開催、企業訪問の機会を増やし、就職情報を充実させた。 教務部と連携を図りながら、入学志願者増への対策を行なった。</p>
<p>(2) 産学連携プロジェクト 企業と連携し、カーボンニュートラルな社会の実現を目指した製品開発プロジェクトに取り組んだ。製品には当該企業が開発した環境に配慮した材料を使用し、完成した製品は大阪・関西万博の企業館で販売予定。</p>
<p>(3) 産官学連携プロジェクト 大阪公立大学文学部心理学科と連携し、企業向けエビデンスを得るプロジェクト（ヘルプマークのプロジェクト）に取り組んだ。</p>
<p>(4) 1年・研高連携プロジェクト デ研1年生26名と和歌山市立和歌山高等学校デザイン表現科生徒41名でそれぞれの学校を広報するショート動画を制作した。学校紹介動画を題材にしたことで、お互いに学校の魅力を伝え合うことができた。</p>
<p>(5) 2年・課題研究 課題研究はビジュアル (V)、プロダクト (P)、スペース (S) の3分野に分かれて取り組んだ。 V分野は人文科学、社会科学、理工学の3グループに分かれて研究をすすめた。とりわけ理工学グループではUI/UXやAR、VRの研究をすすめた。 P分野は内定先に捉われず、俯瞰的な視野で研究活動を進めさせている。 S分野は希望者の少ない傾向にあるが、メタバースやゲーム等の分野を取り込むことによって、受講希望者が増えてきている。</p>
<p>(6) IT関連 IT分野のプロジェクトでは、大阪商工会議所とURが実施主体となっている森之宮ARプロジェクトに取り組んだ。学生に3Dに興味を持たせ、AR作品の内製化も可能となった。また、IT関連企業の発表会に参加させることで、ポートフォリオ制作や就職活動の学生の励みになっている。どちらも課題は残されているが、今後も継続していきたい内容である。</p>
<p>(7) 学校紹介 入試説明会のための広報物をデ研1年生でデザインしている。教職員目線ではない、現役の学生目線による本研究所の魅力発信につなげているとともに、工芸高校との交流授業の教材として、高校との連携においても活用している。</p>
<p>(8) 地域連携 地域連携プロジェクトの1つとして「天王寺みらいプロジェクト」に取り組んだ。天王寺区以外にも大阪市区長会との連携プロジェクトや生野区の「こども工作教室」への協力を通して、ものづくり教育全般につながるプロジェクトに取り組んでいる。 講師登録会ポスターへの協力も好評を得ている。</p>

## 3 今後の教育課程への意見

○私は仕事として食堂のサンプルを作っている。食品サンプルの場合、おいし「そう」に見せることが重要である。デザインの分野とよく似ていると感じる部分は、特長をきちんと捉え、その部分がうまく他者の目に留まるようにアピールすることにつきて思う。産業界としてもAR技術、3Dプリンターの技術やLEDによる照明技術は将来有望だと感じている。デ研の教育内容はすばらしいので、今後も教育内容を他者にアピールして行ってほしい。

○IT会社ではデジタルで解決できる課題はたくさんあるが、デジタルでは解決できない課題も世の中には多くあり、デ研としてはデジタルで解決できない分野も取り組んでもらいたい。デ研展を見て、作品そのものももちろんであるが、作品を楽しませる仕掛けが充実していると感じた。生成AIはこれから目が離せない分野であるが、データがないと何も作れないところが弱点でもある。生成AIではできないような人をワクワクさせるアイデアをデ研では育成しているので、今後、より伸ばして行ってほしい。

○今回のデ研展は高校生にデザインのイメージが伝わりやすい構成、展示だったのがとてもよかった。課題研究の展示は学生一人ひとりの個性がよくわかって良いと思う。S分野の展示で建築、インテリア分野の生徒が興味を持てる効果が高かったように思う。デ研の協力で自校でもメタバースに取り組んだことを中学3年生にアピールしたところ大きな反響があった。建築分野でもXR分野で仕事をしている卒業生の講座では生徒のモチベーションが高かった。「メタバースと言えばデ研、と思われるようにすればよいと思う。